

---

# この星を君と共に

藤沙良

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

この星を君と共に

### 【Nコード】

N4915W

### 【作者名】

藤沙良

### 【あらすじ】

別れ話を切り出したのに、私は、彼の優しさに縋り付きたくなつた。でも、彼を私にしぼりつけたくない。逃げてしまった私を、彼は追いかけてきて、そのせいで、彼は事故に。

過去の恋愛にトラウマを抱える彼女が、彼に幸せになってもらいたい話です。

## この星を君と共に(上)

割れたガラス、崩れたコンクリートの壁、ざわざわと集まる野次馬。

救急車で運ばれていく、体中がボロボロの男性をじっと見つめていたのは、現状を理解するためであった。

スーツ というには、あまりにも損傷が激しすぎたが、一般的なダークグレーの布地に、道端に取り残された真新しい革靴が、かろうじて彼の姿を思い出させる。

「……嘘、でしょう?」

無意識に否定の言葉を吐き出してみたものの、その声は想像以上に弱々しく、この人ごみの中では誰にも届くことなく消えてしまった。

信じられるはずがない、信じたくない。

まばたきを何度も繰り返して、それでも目の前の光景が変わらない。もしかして、本当に? そう思うたびに、足先から冷たくなっていく気がした。いや、実際に私は顔面蒼白で、今にも倒れてしまいうようなほど、目は虚ろなのだが。

「カサカサに乾いたくちびるをなんとか舌で濡らして、呼びかけるのに、それにこたえてくれる人はいない。」

「大丈夫ですか?」

激しく肩を揺すられながら、かけられた言葉に、一瞬、自分がどこにいるのかわからなくなっていた。

虚ろな目で見つめ返す私を隊員の心配気な瞳が見下ろす。

「あなたも乗ってください、彼の知り合いですね」

「あ、……はい」

促されるまま、別の救急車へ誘導される。

簡易のベッドに座り、腕や足に消毒液を掛けられて、初めて自分

もひどい怪我をしているのだと分かった。

久しぶりのデートだった。

学生の中から数えると、付き合い始めてから六年が経過していた。彼はサークルの先輩で、入部理由は一目惚れだった。

星なんて全く興味がなかったけど、サークルの呼び込みで熱く語る彼の横顔にしばらく目を話す事が出来ないでいた。

それまで、年相応に恋人とかもいた。

と、言っても、元カレがいたのは高校の時の話で、お子様なお付き合いだった。

その元カレに二股をかけられて、更には私の方が浮気相手と言う痛い過去に、暫く恋人はいいかな。と、思ってから早二年。

入部したものの、自分からアピールする気にもなれず、ただ彼を見ていた。

星について熱く語る彼の瞳は、それ自体が星のように輝いていて、彼と同じ世界が見たいと思うほど、私も星にはまっていた。

何時間も星空を見上げ、星の物語の本を読みふける日々。

彼と同じ世界が見れるのが楽しくて、彼を見に来ていた毎日が、彼と同じ世界を見に来る毎日に代わっていた。

「本当に、星、好きなんだな」

サークルのイベントでキャンプに出掛けた日の事。

私と同じで、好きな人目当てでやってきた女性たちと、男性たちは星そっちのけでキャンプファイヤーなんかをはじめていた。

都会の眩しさから離れて、こんなにきれいな星が見える場所に来たのに、だ。

少し離れた丘に、小さめのレジャーシートを広げながら降り注ぐ星を見上げるように寝ころんでいた。

突然話しかけられた声、目の前に現れた顔は、私を上を向いて寝ていたため、月の光が逆光となって表情は解らなかった。

ただ、掛けられた声に、鼓膜と鼓動が震えたのは確かだ。

「……、大学に入ってからですけどね」

何とか、そう返すと、かすかに笑ったような音が響いた。

直後に顔が視界から消えそうになり、慌ててそちらを目で追っていた。

私と同じようにレジャーシートの開いていた部分に寝転がった彼は、星空を見上げていた。

彼の切れ長の瞳に、満点の星空が閉じ込められているようで。

思わず、横を向いたまま見惚れてしまった。

肩が触れそうな距離にいる彼に、呼吸も忘れるぐらい見入ってしまった。

「綺麗だね」

そういった彼の言葉に、私は同じように星を見上げた。

キャンプファイヤーと共に騒ぐ声も聞こえないくらい、私と彼だけがこの星空の下にいるような、錯覚。

「綺麗ですね」

そう、返した私の頬を、何かがするりつと撫でて行った。

瞳を動かそうとした私の視界を、もう一度、遮る影。

今度は顔だけではなく、全身で覆いかぶさるようなその影に、私は目を見開いていた。

「本当、綺麗だ」

じつと見つめられる視線。

逆光で影になっているはずなのに、目と鼻の先まで迫った彼の顔は、はつきりと見えていた。

私は状況が理解できずに、彼の顔をただ、見上げていた。

彼の視線は、まっすぐに私の瞳へと向けられていて、その視線がしっかりと交差する。

「付き合って、欲しいんだけど。だめかな？」

熱を孕んだ視線。

それは、まるで彼が星について語っている時のようで、輝きよりは、その奥に揺れる不安の影の方が強かった。

真剣なその瞳に、私は、頷くことしかできなかつた。

彼は優しかった。

二歳しか違わないのに、凄く甘やかされているのが解って、それが心地良かった。

お姫様にでも、なつたかのようだった。

彼は私に文句は言わないし、何でもいう事を聞いてくれる。

先輩という埋められない差で、彼が一足先に社会人になってしまつて。

今まで、毎日のように学校で会っていたのに、会えないことに不安がる私に、どんなに仕事が遅くなつても電話をくれた。

我が儘に、会いたいと言えば、電車がなくてもタクシーや自転車で駆け付けて来てくれた。

給料を溜めて最初に買ったのは、私の元に来るための車だった。

それが、凄く嬉しくて、休日はドライブに連れて行ってもらった。どんなに遠い場所でも、どんなに仕事で疲れていても、彼は私の行きたい場所に連れて行ってくれた。

それを、寂しく感じるようになったのは、いつからだっただろう。

彼の後を追うように、私も社会人になった。

慣れない環境と、仕事での対人関係に悩み、私は毎日のように愚痴をこぼしていたと思う。

彼はそんな私の言う事を黙って聞いてくれて、慰めてくれる。

それが、嬉しかったのは、確かだ。

ただ、仕事に慣れ、段々と周りが見えてきた私は、彼に我が儘ばかりを言っている自分に気付いた。

そして、彼も仕事で大変なはずなのに、何の愚痴を漏らしたこともないのに気付いた。

気づいてからは不安になった。

私は、彼に頼って貰えていない。

何故、こんなに我が儘な私の恋人なのだろうか。

私は、本当に彼の恋人なの？

考えれば考えるほど、思い返せば思い返すほど、私の中に過去のトラウマが蘇る。

二股、浮気。

会えば、意味もなく問い詰めてしまいそう、仕事を理由にデートを断った。

電話でつい、我が儘を言いそうになって、話の途中で切ってしまった。

彼に嫌われたくない、そう思えば思うほど、私は何もできなくなっていた。

そんな私に、無理強いをするわけでもなく、無理をするな、一人で考えこむなよ、と優しい言葉を投げかけてくれる彼。

そんな状況が半年も続いて、私はこのままじゃいけない、と思った。

このままじゃ、彼に迷惑をかけているだけだと。

半年も考えて、考えて、私にできる最良の事とは、彼と別れる事だった。

久しぶりのデートの約束をした。

これが最後だから、といつもより念入りにおめかしをした。

待ち合わせに時間より、一時間も早く着くと、既に彼がそこに立っていた。

いつもの私は、待ち合わせの時間のギリギリにつく。

私の姿を見つけた彼は、少し驚いた顔をして、その後に嬉しそうに笑顔を浮かべてくれた。

こんな、素敵な人、私の我が儘でしばらくつけていては駄目だ、と思った。

今日、一日、今日、一日だけ、彼の恋人であるという幸せを噛みしめよう。

いつもは、恥かしくて手なんてつなげないけど、今日で最後だ

から。

積極的な私に、彼は笑顔で、握り返してくれた。

楽しい、楽しい時間はすぐに、過ぎる。

時間が経つごとに、気分が沈んでいく私に、彼は気づいていた。

それでも、黙って、私が言うのを待っていてくれた。

そして、遂にその時。

「別れてほしいの」

私のマンションがある駅の改札口で、私は彼に別れを切り出したのだ。

彼は目を見開くと、暫く私を見つめた後、何故別れなくてはいけないか言ってもらわないと別れない、と、いつもより低い声で問いかけてきた。

私にはわからなかった。

こんな、我が儘な女と別れられるんだから、そんな、理由なんて必要ないじゃないかと。

何も言い返さない私に、彼は、自分に悪いところがあるんだっから直すから別れないでくれ、と、続ける。

違つのに、彼に悪いところなんてないのに。

## この星を君と共に(中)

ただ、赤いランプを見つめていた。

無機質な白い廊下の奥に光るそれを、冷たいナイロンの椅子に座って、ボウツと眺めていた。

先ほどまで医者と看護師の人が慌ただしく行き来していたが、今はそれもない。

ふと、自分の腕を見ると、白い包帯が巻かれていた。

手当をされたのだろう。何か、言われていたのかもしれないが、覚えていなかった。

また、目線を上げて赤いランプを見つめる。

どれぐらい、時間が経ったのだろうか。

静かな空間に、私とあの赤いランプしかないような、奇妙な感覚の中に、パタパタと廊下を走る足音が聞こえた。

ゆっくりとした動きで、音のした方へと目を向けると、ぼさぼさの髪に息を切らせながらこちらに走ってくる女性の姿があった。

よほど慌てていたのか、前を合わせていない上着の下に見えるのは、デフォルメされた猫の描かれた少しくたびれたトレーナーだった。

額から汗が流れ、深く刻まれた皺を伝っていた。

その目元と口元に彼の面影を見つけ、私は理解した。

「っ申し訳ありません！」

椅子から立ち上がった私は、そのまま深く頭を下げる。静かな廊下に、私の声が響き渡っていた。

近くまで寄ってきていた女性は、私の行動に足を止めると、じっとこちらを見ているようだった。

膝のあたりでぐつと握りしめた指先は、白くなっていた。

急に立ち上がったためか、頭がふらりと揺れ掛けるが、唇を噛む事で何とか体勢を保った。

「……顔を上げてください」

女性の小さな声が聞こえた。

しばらく、顔を上げられずにいた私は、その声にのろのろと体勢を戻す。

それでも女性の目を見る事が出来なくて、女性の足元を見るのが精いっぱいだった。

「あの子は貴女を守ったのね」

「……はい」

「だったら、謝らないで」

言われた言葉に驚いて思わず、女性に目を向けてしまう。

女性は今にも泣きだしそうだった。だけど、その口元には、笑みが浮かんでいて、私は何故、と迷ってしまった。

そんな私の感情に気付いたのか、ゆっくりと近づいてきた女性がスツと腕を上げる。

思わず、きつく目をつむってしまふ。

想像したような衝撃はなく、頭のとっぺんに感触があった。

「貴女があの子の彼女ね。会えるのを楽しみにしていたの」

間近で見る女性の目は優しく細められていて、何度も往復する頭の手がとても暖かくて、いたわるような柔らかい声で。

気が付けば、目の前の女性の顔がぼやけていた。

子供のように声を上げて、泣き叫んでいた。

必死に頭を下げた謝る彼に私は何も言えなかった。

彼が悪いわけでもないのに謝らせる私は、私なんか彼のそばにいてはいけない、そう思ってしまった。

泊まりに行くところ飯もお風呂も彼が準備してくれている。デートも私が楽しめるところばかりで、たまには高級そうなレストランに連れて行ってってくれる。毎年の誕生日だけではなく、少し私が落ち込んだ時にも、プレゼントを贈ってくれる。

指輪やネックレスといったアクセサリーだったり、星の写真だっ

たり。

本当に、優しい彼。

私には勿体ない、彼。

バレンタインに、義理だと言いながら持ち帰るチョコレートの中に、明らかに本命だと思われる物が混じっている。

会社で彼に、本気で好意を寄せている女性ひとがいる事を、私は知っていた。

彼は甘い物が好きじゃないから、私にすべてを渡して、食べても良いよ、と言うから知らないかもしれないけど。

私はそれを見るたびに、彼がとられちゃうんじゃないかって、不安で仕方がなかった。

彼は気にしていないみたいだけど、彼の努めている会社は、そこそこ安定した企業だった。

一度、見せてもらった給料明細なんて、私のもの比べる気にもならなかった。

私が彼と同じ年月を働いたとしても、到底、同じ場所まで行けるとは思えなかった。

将来、有望なのだろう。

同じ会社でもない私がそう思うのだから、同僚で同期ともなれば、本当に好きになる人がいてもおかしくない。

我が儘ばかり言う、私なんて、いつ、飽きられてもおかしくない。

いずれ、離れなければいけないのなら、そうなってしまうのなら。

今ならまだ、大丈夫だと思っていた。

今、自分から離れれば、私は彼を忘れられると、思っていた。

「……ごめんなさい」

気が付けば、彼の言葉に、そればかり繰り返していた。

理由を聞かれても、体調を心配されても、謝罪の言葉を向けられても。他の言葉など忘れてしまったかのように、私はそればかりを繰り返していた。

そう、でもしないと、彼に言ってしまうそうだったから。

好きだと、私だけを見てと、私以外の女性ひとに話しかけないでと。

そんな、みつともない我が儘、言ってしまったら、いくら優しい彼でも、私の事を嫌いになるのだろう。

スツと伸ばされた彼の指が、私の頬を優しく撫でた。

指先に着いた、黒い雫に、私はずいぶん前から泣いていたのだろう。

いつも以上に気合を入れてきたメイクは、見るも無残な事になっているのだろう。

結局、その時に別れる事は出来なかった。

彼が、もう一度考えて欲しい、と頭を下げてきたからだ。

これが初めてかもしれない。

お願いだから、と眉を下げ祈るようにお願いする彼を見るのも、そもそも、彼にお願いされること自体が、初めてだと思った。

私をマンションまで送ってくれた彼は、来週、会いに来るから、そついつて帰って行った。

別れ際に、いつでも連絡を待っているから、と頭を撫でてくれた。考え直してくれたら、別れなければいけない理由が話せるようになったら、すぐにも電話を欲しいと。

連絡は無くても、来週、必ず会いに来ると。

自分も考えるから、来週、会いに来るからと。

一人、マンションのベランダから、遠ざかっていく彼の背中を見つめて、私はどうしようもなく怖くなった。

ああ、言うてはいたけど、彼は会いに来ないんじゃないかって。

今日の無様な私の姿を見て、もう、愛想を尽かしたんじゃないかって。

別れるんだったら、それでいいはずなのに、私は自分勝手にそんな事を考えていた。

自分から別れると言っておきながら、性懲りもなくそんな事を考

える自分に、布団の中で小さく丸まっていた。

## この星を君と共に(下)

手術室の前で、彼に良く似た優しい笑顔を向けてくれる女性と、手を握り合っていた。

時計の音だけが響く無機質な廊下で、自分の心臓の音がやけに耳に着いた。

どれぐらいの時間、そうしていただろう。

食い入るように見つめていた、赤いランプの光が消える。

一瞬、強く握られた手を、反射的に握り返していた。

少しして、目の前のドアが静かに開いた。

女性と手を握りしめたまま、椅子から立ち上がると、深い緑色の服に身を包んだ男性に近づいた。

「あの、む、息子は……？」

震える女性の声が、廊下に反響する。

マスクを取った男性は、神妙な顔でこちらを見返す。

「手術は成功しました。ですが、頭を強く打っているらしく、いつ目覚めるのかはお答えできません」

告げられた言葉に、目の前が暗くなる。

私が彼を呼び出したから？ 私が彼と付き合っていたから？

全身から力が抜ける感覚に、握りしめていた女性の手をするりと離してしまった。

それに気づいた女性が、すぐにまた、私の手を取りぐつと力強く握りしめる。

はっとして顔を上げた私に、女性は笑顔で、大丈夫よ。と呟く。しかし、自分も不安なのだろう、つないだ手は震えていた。

手術室から運び出された彼の身体には、複数の管が付けられている。全身と、頭部から顔の左半分を覆う包帯。

かすかに上下をする胸が、彼が生きている事を伝えていた。

ベッドのそばに用意された椅子に座りながら、その姿をただ、見

つめていた。

私用にもう一つ、ベッドが用意されていたが、到底、眠れそうにはなかった。

彼の眠る布団に私の影が浮かび上がっていた。

振り返ると窓の外に丸い月が昇っている事に気付いた。すっかり暗くなり、小さな光がいくつも散らばっている。

スツと、窓を横切るように、一筋の光が夜の闇の中を走る。

流れ星が、ただの宇宙に漂う小さなちりだと、本で読んだ事がある。広い宇宙からみるとちりのように小さな天体が、地球に衝突するときに燃えて光っているのが、流れ星と呼ばれていると。

自慢げに話した私に、彼は願いを叶えてくれるお星さまの方が、夢があるだろって、笑って言っていた。

「彼の目を覚まさせて。私の命より大切な人なの」

彼を助けてくれるのなら、私の命なら、いくつでも持って行ってもかまわないから。

彼が目を覚ますのなら、私の事を忘れてしまっても構わないから助けてくれるなら、私はなんだってするから。

握りしめた両手を額の前に組んで、ひたすら窓の外の星に願った。

頬を走る何本もの黒い筋。鏡の中の私の指がそこに触れて、爪の先で軽くひつかくとポロポロと剥がれ落ちていった。

目は赤く充血して、目の下にできたクマの所為でいっそうひどい顔になっている。

布団に潜り込んでから、色々と考えているうちに気が付けば朝になっっていた。

いつもの時間に鳴る携帯のアラームが、泣き過ぎと寝不足の頭の中で反響して、じわじわと痛みを訴えていた。

蛇口をひねって、冷たい水を勢いよく出す。跳ね返った水が床を濡らしたが、両手ですくって顔を洗った。

全体的に熱を帯びて腫れぼったい感じがしていた顔に、冷たい水

が当たると少し引き締められたように感じた。

一晩放置された涙で崩れたマスカラは水なんかじゃ落ちなかったけど。充血していた目とむくんでいた瞼は少しだけ、ましになった気がする。

流石にそれだけでは外を歩けないので、服を脱いでシャワーを浴びる。お湯でしっかりと顔と体を洗いメイクを済ませて、いつもより少し遅い時間にマンションを出た。

目元のクマを隠すように、普段のものより明るめのコンシーラーを使った。

いつも余裕をもって出社していたからか、電車を一本遅いものにかえたのに、会社にはそう変わらない時間についていた。

今日の作業の予定を確認して、パソコンに向かい、暗くなりそうな思考を無視するように、ただ、ひたすら作業に集中していた。

午前中の作業が終わり、お昼のチャイムが鳴って、お弁当を持ってきていないことに気が付いた。

そういえば、朝も食べてこなかった。

そう思うのに、お腹がすいたように感じられなくて、社内の自販機でカフェオレを一つ買って飲むだけで終わらせた。

午後黙々と作業をこなし、定時に会社を出る。

会社帰りの社会人がまばらな駅で、家とは反対方向に向かう電車の切符を買った。

電車の窓の外の風景は風のように流れ、ひしめき合うビル群の灰色から、点々と緑が増え始める。

特急で一時間もかからずに着いた駅で降りると、目の前には長閑な田園風景が広がっていた。

懐かしい景色と頬を撫でる風に、深く息を吸い込む。

空気に味があるかはわからないけど、ビルで遮られ排気ガスが充滿する者よりは、とても美味しいと思った。

数回、深呼吸をして味わいを楽しむと、ゆっくりと歩き始める。

数メートルおきに民家が立ち並ぶ通りを過ぎ、田んぼと畑ばかりが広がり始め、民家も見えなくなってきたあたりに小高い丘があった。

迷うことなく丘を登り、緑一色の地面を足早に進んでいく。

仕事用のヒールの靴は歩きにくくて、太もものあたりまで伸びた葉先が、ストッキング越しに肌をさしむず痒かったけど、私は丘のてっぺんより少し奥に行った開けた斜面まで歩いて行った。

遮る高い建物も木もない一面に、傾き始めた陽が見せるオレンジ色の空が広がる。

草の上に腰を下ろし、手をつくとちくちくする葉先と、しつとりと湿った土の感触が伝わってきた。

汚れるかな。

そう思い考えたのは一瞬で、そのまま体を後ろに倒した私は、仰向けにまだ明るい空を見上げていた。

首の後ろや耳のあたりを葉がこすれて少し痛かったが、すぐに、気にならなくなる。

元カレは、小学校時代からの同級生だった。

小さい頃活発だった私は、女の子の友達より男の子の友達の方が多かった。

その中でも元カレと遊ぶのが本当に楽しくて、一緒にいろんな馬鹿をやったりしていた。

一緒にいて楽しい、が、恋に変わったのは中学になってからだ。変わった、というよりは、自覚した、と言った方が良いのかもしれない。

中学に上がるまで変わらない身長だったのに、同じテニス部に入っただけでもない間に元カレの顔を見上げなければならぬ差が出来ていた。

同じように部活をしても、男らしくしつかりとした体格になっただけで元カレに、異性を意識して話しかけられるたびに心臓がう

るさく跳ね始めるのにそう時間はかからなかった。

それでもその気持ちを言って、関係が崩れてしまるのが怖くて、何も言わなかった私。

付き合い始めたのは、卒業式の日。元カレの方から告白をされてからだ。

進学した高校が違ったので、半ば初恋を諦めかけていた私には、夢のような出来事だった。

二つ返事で頷いた私に、嬉しそうに笑ってくれた元カレ。

学校は違ったけど、帰り道で待ち合わせをしたり、土日にデートをしたりと、二人でいる時間は幸せだった。

その時間がだんだんと少なくなり始めたのは、高校三年になってからだ。

進学のために勉強をしたいから、あまり会えなくなる。そう言われたのは、土砂降りの雨が降る、六月の事だった。

寂しかったけど、悪いって謝る元カレに、私も勉強をするから大丈夫と返していた。

頑張っている元カレの邪魔をしたくなかったし、大学は同じところに行こうな、と言われたら私も頑張りがかった。

会えない日が増えても、電話で声を聴けるだけで、元気になれた。でも、どんどん忙しくなって、毎日かかってきていた電話は二日に一度になり、一週間に一度になり。

呼び出し音が鳴り続ける携帯に、ずっと耳を当てている私がいいた。メールの返事も中々かえってこないけど、忙しいから、頑張ってるの大学に行こう、という言葉思い出して頑張った。

塾で模試があるから会えない。  
クリスマス、前から予定していたデートが元カレのこの一言でなくなった日。

寂しがっている私と、私を心配した女友達の5人でカラオケに向かった。

カップルの多く通る綺麗なイルミネーションのされた通りで、腕

を組んで歩く二人を何故、見つけられたのだろう。

元カレとその腕に抱き着くように歩く可愛らしい人。

人ごみの中、呆然と一点を見つめる私に、気づいた友達はその視線の先をたどる。

中学からの友達で気の強かった一人が、元カレの姿を目に止めてから、私と元カレの関係が崩れるまでの時間はすぐだった。

何もできないでいる私の代わりに、怒りを露わに元カレに詰め寄る友達。

元カレとその腕に抱き着く彼女は、高校受験の時期に塾で知り合い、趣味が合う事もあつてすぐに仲良くなつたらしい。

その頃から彼女の事を好きだった元カレは、告白するが振られたという。

それが悔しくて、自分の事を好きだと気づいていた私と、気まぐれに付き合う事にしたらしい。

でも、高校に入ってから、どんどん格好良くなる元カレを、一度振った彼女は惜しくなった。

今度は、彼女が元カレに告白をする。付き合い始めたのは二年に上がつてすぐの事。

元カレは彼女が好きだったのだ、振られたから私と付き合い合っていただけだったのだ。

自分の気持がばれていた事にも、私と付き合いながら告白を受けた元カレにも、格好良くなったから二股になるとわかっていて告白した彼女にも、何も言う気力がなかった。

一緒の大学に行こうつて、言ってくれたじゃない。

好きだよと囁き、優しく合わせた唇の幸せだった時を思い出してその唇がグロスの光る元カレの隣にいる彼女と繋がっていたのではないかと思うと、途端に気持ち悪くなった。

悲しいとか、悔しいとか、憎いとか、そんな気持ちよりも大きく、あんなに好きだった元カレの顔が見ていられないくらいに気持ち悪いと思えなかった。

現実なんて、こんなモノなんだ。  
全員が全員、元カレみたいなわけではないと思って、暫くは男と話す事さえ嫌になっていた。

そんな私が、何故、彼に一目惚れをしてしまったのか。

告白してくれて、好きだと言ってくれた彼を、私は無意識の内に試していたんじゃないかって思う。

あんなに我が儘を言ったのも、私の事を好きだって、実感したかったんだと思う。

そんな私をすべて包み込んでくれた彼だから、こんな私と一緒にいるには勿体無さすぎて。

眩しすぎる彼といると、私はどんどん暗く、どんどん我が儘な嫌な子になってしまう。

いくら優しく、いくら素敵な彼でも、いつかこんな私の事をおかしいって気付くはずだ。

そして、彼の周りにいる魅力的な女性ひつに気付いて、私の事を嫌いになってしまふのだろう。

嫌われて捨てられるなら、捨てられない内に私が離れるしかないじゃない。

彼が好きだという気持ちも、こんなモノだと、すぐに忘れられるはずだから。

今ならまだ、彼に嫌われていないという事実だけで、私は納得できるはずだったから。

気が付けば見上げる空に、一つ輝く光があった。

あたりはまだ明るく、陽は落ち切っていないけど、一番星が光り輝いていた。

寝ころんだまま、深く息を吸い込む。

ぐっとお腹に力を入れて起き上がると、服や髪に着いた草と土を

落として、電車に向かう。

歩きながら、ポケットに入れた携帯を手にすると、電話帳から番号を呼び出す。

ワンコールで出た相手に、電話越しに慌てているのがわかる声に、思わず小さく笑い声が漏れていた。

彼が来るか、来ないか、そんな事を毎日考えて眠れない時間を過ごすのは嫌だった。

弱い私は優しい彼にどうしてもすがりつきたくなくなってしまっけど、彼が好きだと思う気持ちは誰よりも強いから。

彼が幸せになれるのなら、私は頑張れる。

昨日と同じ、私のマンションがある駅の改札口で、電話で呼び出した彼は、私を待っていた。

不安そうにこちらを見つめる彼に、私は笑顔を向ける。

一瞬、目を見開いた彼は、すぐに笑い返してくれる。

「別れてほしいの」

近づいた私に触れようと、手を伸ばしかけた彼の腕が、ピクリッと震えて止まる。

後、数センチで触れられる距離にあるのに、身体を動かさずにいる彼は、視線だけ私へと向けた。

昨日とまったく同じ言葉を継げた私に、昨日と違う笑顔の私が彼の見開かれた瞳に映っていた。

「一緒にいると、苦しいの、私が、私じゃなくなる気がするの」

見つめたまま続ける私に、寄せられる彼の整った肩。

「私の事を少しでも好きなら、私のために別れてほしい」  
「ずるい、言い方だと思う。」

優しい彼は、そんな事を言われたら、それ以上私に何も言えなくなる。

小さく開閉する口は、結局音を紡ぐ事は無く、真一文字に結ばれた。

射抜くような強い力を込められた瞳と、しばらくお互いに無言で見つめ合っていたが、彼の瞳が哀しげに揺れたのを最後に視線が外れる。

「……わかった」

「ありがとう」

重々しく返す彼に、私は笑顔で答える。

一世一代の演技だった。彼のために、駄目な私が離れる為に、すがりつきたい気持ちも、好きだと叫びたい心もすべて隠した。

改札に向かう彼に、小さく手を振る。

何度も振り返る彼を、笑顔で見送る。

本当に最後だから、彼の姿を目に焼き付けるために、今にも泣き出しそうな感情を必死に押し殺して彼が私から離れていくのをただ見送っていた。

耳をつんざくようなブレーキ音と、周囲に悲鳴が上がったのはその時だった。

振り返った彼の顔が、驚愕に染められる。

私の後方を見るその視線に、肩越しに振り返った私は、自分に近づいてくる大きな影を見た。

一台のダンプカーが、車体を斜めにさせながら凄い勢いでこちらに向かってくる。

スローモーションのように見えるのに、私の足はそこから動く事が出来なくて。

浮かぶのは彼の顔、優しく微笑みながら私を好きだと言ってくれる、幸せそうな彼。

最後に、もう一度だけ。

足は動かないのに、彼の姿を自分の瞳に焼き付けようと、駅の改札に振り返った。

地面に差した大きな車体の影と、すぐ目の前に現れた人影と、身体の右側から与えられた衝撃で横に飛ばされるように倒れた。

酷い音が響いた。

一瞬、何が起こったか解らずに、倒れた体制のまま目を開ける。見える範囲に、先ほど見たダンプカーの車体が見えた。

そのすぐ近くに走る、赤い筋。

耳鳴りがする、サイレンが鳴り響く、赤い筋の先を見たくないと思つのに、自然と視線が滑って行つた。

つい、先ほど目にしていた、真新しい革靴。その先に、肢体をだらりと投げだし、横たわる姿。

目に映るこれは、現実？

髪を優しく滑らせるように撫でる、懐かしい感覚がする。

これをしてもらうと私はとても幸せな気分になれるのだ。落ち込んでいる時も、苛々している時も、嬉しいときはもつと嬉しくなる。

そして、決まってこの後は、私がもつと幸せになれる言葉を言うてくれる。

「……好きだよ」

小さく私にだけ聞こえるように囁かれる言葉に、余計に幸せになる。

「私も好きよ」

恥かしくてあまり言えないけど、たまに勇気を出して私も言うのだ。

蚊の鳴くような小さな声しか出せないけど、絶対に聞き漏らさない彼は、本当に嬉しそうに目元をほころばせる。

その顔が私は好きだ。

「結婚してくれないか」

いつもはそのまま見つめて、彼がまた頭を撫でてくれるのに。

今日は、ありえない言葉が聞こえた。

夢見心地だった私の頭は一気に覚醒して、見開いた目に飛び込んできたのは白いシャツだった。

目を覚まさない彼のそばで、いつの間にか寝てしまっていたよう

だ。

慌てて顔を上げると、少し持ち上がった腕が目映った。

腕には痛々しい包帯が巻かれていて、ゆっくりと視線を上げると、包帯で三分の一が隠れてしまった顔があった。

その隠されていない方の目が開けられて、私の視線とぶつかった。

「返事は？」

「え？」

「結婚、してくれないか？ それとも、こんなミイラ男の事は好きになれないかい？」

小さく唇の端を上げる彼に、私はどんな顔をしていたのだろう。

すでに視界に映る彼の顔はぼやけていて、どうして、こんな私なんかをって思う、のに。

「好きよ、当たり前じゃない。一目惚れなんだから……」

そういった私に、とても幸せそうに微笑む彼。

彼の幸せが、もし、私と一緒にいる事なら。

「貴方の幸せって？」

end

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4915w/>

---

この星を君と共に

2011年10月26日22時49分発行